



Title	Sukhāvatīvyūha(梵文無量寿經)、東方偈の研究：和訳と註(1)
Author(s)	福井, 真
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2001, 35, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10039
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Sukhāvatīvyūha (梵文無量寿經)、東方偈の研究

— 和訳と註(1) —

福井 真

[0 はじめに] *Sukhāvatīvyūha* (*Sukh*、梵文無量寿經) はインド大乗仏教の初期に成立した、浄土仏教において最も重要な經典である。近年、現存する梵文写本の集成が出版され、*Sukh* 原典の批判的研究が可能となった。本稿ではその集成に依拠し、*Sukh* の所謂東方偈に関して原典の批判を行い、訳、並びに思想内容、言語、韻律に関する分析をまとめる。

[1.1 梵文写本と校定本] 藤田本：藤田宏達『梵文無量寿經写本ローマ字本集成』、I-III、山喜房佛書林、1993-1996／Ed.A. : A. Ashikaga, *Sukhāvatīvyūha*, 法藏館, 1965／Ed.F. : 藤田本中の校定テキスト Af／Ed. MN : F. M. Müller and B. Nanjio, *Sukhāvatīvyūha*, Oxford, 1883。

[1.2 漢訳、藏訳] 漢訳には五訳が現存する¹⁾。『阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經』(大阿)：大正新脩大藏經(大正) 12、300a-317c (吳、支謙、A.D.222-253頃、或は後漢、支婁迦讖、A.D.180頃)、『無量清淨平等覺經』(覓經)：大正 12、279b-299c (西晋、竺法護、A.D.308、或は曹魏、帛延／白延、A.D.258、或は前涼、帛延、A.D.4c 中期～後期)、『無量壽經』(壽經)：大正 12、265c-279a (仏陀跋陀羅・宝雲共訖、A.D.421)、『大寶積經・無量壽如來會』(如來會)：大正 11、91c-101c (唐、菩提流志、A.D.706-713)、『大乘無量壽莊嚴經』(莊嚴經)：大正 12、318a-326c (宋、法賢、A.D.991)。

藏訳は「phags pa 'od dpag med kyi bkod pa žes bya ba theg pa

chen po'i mdo (尊い無量光の様相と名付けられた大乗經典)」として、Kanjur 大寶積經に編入されている (A.D.8c. 後半～9c. 前半)。本研究では佛教学総合研究所「淨土教の総合的研究」研究班編、『藏訳無量壽經異本校合表 (稿本)』(京都、1999) を使用した。

大阿には韻文は一切なく、東方偈は大阿以外の漢訳に訳出あり；梵本では經典の最終部分近くに位置する流通偈が、壽經と如來會では東方偈に連續して一つの韻文群を形成している；莊嚴經では梵本の第13偈以降に相当する部分が散文である；藏訳は梵本と同じく21詩節からなる。

[1.3 梵本写本] 藤田本による情報と筆者による調査結果²⁾の要点をまとめると (写本の略号は藤田本に従う)。梵文写本は38本が現存し、R, N1 が貝葉本、他は全て紙本；N1 は不完全で欠損が多い；N1 の日付は A.D. 1152-1153, R も12世紀頃のもの；次いで T5 (1698), Ox (1739), K1 (1797-8) の順で古く、残りは19-20世紀のもの。大別して R, N1 と Ky, T3 の二つに分かれ、他は全て後者により近い；最古の二写本のうちの完全本の R の重要性、信頼度は高いが、Ky が古い読みを示す場合もある；以下は上記4写本以外の関係 (矢印は明らかな伝承経路、括弧内はより近い関係)。Group(Gp) I : T5, T4, K6 → K7, T2, B, O2; Gp II : K1, [T6, S]; Gp III : [Ox, H1, K4] [Ko, K3 → K5] Ro, T1; Gp IV : K10, K9, C, As, K2, H2; Gp V : L, N3, N4, D1, D2, O1, O3, [N2, Kt]。

東方偈について、T6, S は 6a の途中から 7c の途中までを欠く；T8 は東方偈全体の写本なし。最初の4偈に大きな混乱がある。R : 1 ○ 2 ○ 3 ○ 4 ○; N1, T1 : 1 ○ (T1 △) 2 ○ 3 × 4 ×; T5 他 34 本 : 1 △ 2 ○ (Ky, T3 □) 3 ○ 4 ○ (○は偈全体あり、×は偈全体なし、□は重複あり、△は部分的にあり)。これに関して、覺經、壽經、如來會でも梵本の番号で言えば 1, 3, 2, 4 の順に並んでおり、混乱が見られる。第2偈、第4偈の韻律が他の詩節の韻律とは異質ということもあり、最初の4偈

(特に第2偈、第4偈) が他とは起源を異にする可能性がある。

[1.4 東方偈の韻律] 21詩節中、第2偈、第4偈だけが、mātrā という韻律上の時間的単位により規定される mātrāchandas (mch.) 類の韻律、vaitāliya (vait.)、或は aparāntikā (aparā.) で書かれている。定義はそれぞれ1詩節4句で、vait., ac 句 : 6 mātrā + -U-U-; bd 句 : 8 mātrā + -U-U- (Pāli では opening 内部に syncopation : -- → U-U を許す)、aparā., abcd 句 : UUU-UUU -U-U-³)。東方偈では両偈とともに a: UU-UU -U-U-, b: ---UUU -U-U- (*-U-UUU -U-U-), c: -U-UUU -U-U-, d: UUU-UUU -U-U- という韻律形態を示す (*はテキストを訂正した場合)。尚、本經前半部の讚仏偈、重誓偈の韻律も mch.。

他の19詩節は、音節の数と軽重が固定した韻律の分類 (akṣaracchandas) に属す、triṣṭubh (tri.、11音節) と jagatī (jag.、12音節) で書かれている。東方偈の tri. と jag. は、音節の制限が比較的緩いものである : tri. 句 : X-U- XUU -U-U, jag. 句 : X-U- XUU -U-UU (X : U/- UU の何れも可)。特徴としては、tri. 句と jag. 句の1詩節内での混合、第1音節、第5音節での resolution (- → UU)、break に UUU など、仏教混淆梵語 (BHS) で書かれた韻文の特徴が見られる⁴。

[1.5 Sukh、並びに東方偈の概要] Sukh の前半部分では菩薩 Dharmākara (法藏) が誓願を立てたことがその内容を中心に語られ、後半部分では Dharmākara が仏 Amitābha/Amitāyus (阿弥陀仏) となったこと、その仏土 Sukhāvatī (極楽) の様子などが描かれる。

Sukh は散文が中心であるが、その中に六つの韻文群があり、東方偈はその四番目として経典の後半部分に位置する (Ed.A. 44,1-47,9)。東方偈には部分的に対応する散文部分がある (Ed.A. 43,14-22; 50,2-51,3)。

東方偈は、Sukhāvatī の美質の説明の後、世尊が Ānanda に語る形で、菩薩たちが Sukhāvatī を見に行く場面を描く。Amitaprabha/Amitāyu

仏の供養、仏とその仏土の称賛、仏による放光の奇跡、その仏土に行くこととの功德などを説き、Sukhāvatī に行くことを勧めている。

[2 東方偈の訳と註 (全21偈)] 第1偈と第3偈、第2偈と第4偈は酷似するのでそれぞれ同時に論ずる。

[第1偈 (Ed.A. 44,1-4; Ed.F. II,971-972, III,319-320); 第3偈 (Ed.A. 44,9-12; Ed.F. II,975-976, III,321)]

(梵文テキストで下線を付した子音群は韻律上、単子音の価値)

yathaiva ^{a)} -gamgāya nadiya vālikā- ^{a)}	U-U- -UU -U-U-
buddhāna <u>kṣetrā</u> ^{b)} ^{c)} -purimena tāttakāḥ- ^{c)} /	--U- -UU -U-U-
yato ^{d)} hi te āgami buddha vanditum	U-U- -UU -U-U-
sambodhisatvā amitāyu nāyakam ^{e)} //1//	--U- -UU -U-U-

主要な異説：a) N1 gaṅgāya nadiya vālukā; 他 gaṅgā nadī(-ya) vālikā (kumā) など — b) R °ām — c) R purimena tāttakāḥ; Ky purimeva tāttakāḥ; 他の全写本は 1b purimena から 1d sambodhisatvā までを欠落 — d) R yatau; N1 yato — e) R nāyakām; Ky, T3 'kā; T5 'ka; Gp V 'kāḥ

まさしくガンジス河の諸々の砂のように、それ程〔数多く〕の諸仏の住処が東方にある、まさにそこから彼ら菩薩たちが、導き手たる仏アミターユ（ス）（寿命が量られたことがない者）に表敬するためにやって来たところの（諸々の住処が）。

tatha ^{a)} dakṣiṇapaścimottarāsu	UU-UU -U-U-U
(*dakṣiṇapaścima-uttarāsu	UU-U- -UU -U-U)
buddhāna <u>kṣetrā</u> disatāsu ^{b)} tāttakāḥ ^{c)} /	--U- -UU -U-U-
yato ^{d)} yato āgami buddha vanditum ^{e)}	U-U- -UU -U-U-

訂正した場合、a 句 opening: initial resolution (第1音節で - → UU)

主要な異説：a) Gp I. (T5, T4 以外), Gp V (N3 以外) tathā; N1, T1 は

第3偈、第4偈を全て欠く —— b) R disatāsu; 他 daśatāsuなど —— c) R tāttakāḥ; Ky, T3 yāvantakāḥ; T5 他 yāntakāḥ (-m̥t-) —— d) K6, K7, T2, O2 ato —— e) Ky, T3 vāditum buddha āgami

同様に、それ程〔数多く〕の諸仏の住処が南と西と北の方角にある、その各々から菩薩たちが導き手たる仏アミターユ(ス)に表敬するためやって来たところの(諸々の住処が)。

[1a] purima は中期インド語(mi.)に見られる、suffix -ima- が付加された空間の性質を表わす adj. で、一般的に「前の」、例外的に「東方の」を意味する⁵⁾。ここでの instr. 形は方向の意味で副詞的な用法(方向を表わす instr. について cf. Ai.Synt §95; CPD s.v. uttara など)。

[1b, 3b] BHS tāttaka は tāvat(i)ka (Aṣṭādhyāyī 5,1,23), Pāli(Pa.) tāvata, tattaka (PED s.v.) に対応 (Pischel § 153; Geiger § 27.7, § 111.6; BHSG § 3.2)。1b tāttakāḥ は 1a yathā を受けて「～程の～」を意味する。yathā + tāttaka- の用例: e.g. Mahāvastu II,242,2-3, 3-4; Saddharma-puṇḍarīka (SP, ed. Kern-Nanjio) 330,11(verse 16,7ab)。

3b では、大別すると、R disatāsu tāttakāḥ、他の写本 daśatāsu yāvantakāḥ (yāntakāḥ)。3ab の諸訳の対応: 覚経「西南北面皆爾 如是恒沙數土(是諸佛遣菩薩 稽首禮無量覺)」、寿経「南西北四維 上下亦復然(彼土菩薩衆 往觀無量覺)」、如来会「三方諸聖衆(禮觀亦同歸)」、莊嚴経「西南及北方 四維上下恒河界(聲聞菩薩數亦然)」、藏訳 de bžin lho nub dan byan phyogs sans rgyas žin rnams ji sñed nas 「このように、西南と北方との如何に多くの諸仏土から」。対応する散文部分は daśasu dikṣv「十方において」(Ed.A. 43,14-22)。覚経、如来会、藏訳からは「方角」を示す語が、寿経と莊嚴経は四方に加え「四維、上下」にも言及しており「十方」を示す語が、それぞれの梵本に予想される。

写本 R disatāsu は BHS diśatā の loc. pl. の mi. 的な語形と考えら

れる。BHS *diśatā* (Pa. *disatā*) は *Ved.* には見られない。Pa., BHS では「方角」を意味し、殆どの場合、韻文で用いられる⁶⁾。

多くの写本が示す *daśatāsu* (*daśatā*, loc.) について、Sukh で幾つかの写本が *daśadiśata(s)* 「十方から」に対して *daśatā* を示す例があるが (讃仏偈 9a; 藤田本 162: K6, K7, T2)、明らかに本来の読みではないし、筆者は他に *daśatā* の用例を見出せなかった。*daśatāsu*、並びに写本上それに後続する *yāvantakāḥ* などは誤伝承、或いは改作かと考えられる。

[1d, 3d] 東方偈に現れる *Sukhāvatī* の仏の Epithet : 1d, 3d, 11a, 17a *amitāyu* (acc.sg.、寿命が量られたことがない者)、2d, 4d *amitāyu* (acc.sg.、同)、5b, 20c *amitaprabhasya* (光耀が量られたことがない者)。これらの内 1d, 3d *amitāyu* の藏訳 '*od dpag med* (無量の光明を持つ者) は梵本と対応しない。梵本と漢訳との間では齟齬がより大きい。覓經：無際光(4d/5b?)、無量覺(1d, 2d, 3d, 4d/5b?, 17a)、無量世尊(11a)、無量光明(20c)。寿經：無量覺(1d, 2d, 3d, 4d)、無量尊(11a, 17a)、他に安養佛(15?)。如來會：無量壽(1d?)。莊嚴經：無量壽(2d, 11a)。

Sukh の東方偈以外では、*amitābha* (光明が量られたことがない者) は固有名詞として頻出するが、*amitāyus* は特定の箇所 (Ed.A. 冒頭 1,4; 仏 *Amitābha* の寿命無量の説明 29,22, 25; 東方偈直後 47,10, 48,18; 東方偈 対応部分 50,27; 最終部分 66,14; その他 55,7, 60,21) でのみ使用される。

これと比べると、東方偈での *amitāyu(s)* の使用頻度は非常に高い。しかも、東方偈に描かれる仏は、光明を発するなど、太陽神的な性格が強く、*amitāyus* よりも *amitābha/amitaprabha* がその名として相応しい。二度だけ現れる *amitaprabha* は意味上 *amitābha* に対応するが、東方偈以外で多用される *amitābha* が一度も現れない点は重要である。

また、大阿段階で既にこの仏の寿命は無量であるという考えはあったが、仏名を經典全体を通じて見てみると、大阿では一貫して「阿弥陀」、覓經

では「無量（尊・世尊・覺・清淨）、無際光、無量光明」、壽經では「無量光、無量壽、無量（覺、尊）」などとなっており、覺經以降、仏名に搖れが見られる。既に存在した Epithet amitābha のインド西北方言形 *amidāa/*amidā が「阿弥陀」の原語で、これが amita + suffix ya/ka と再解釈され、その nom./acc.sg.形 *amidāu が amitāyus と再解釈されたとする説がある⁷⁾。仏名の搖れは、このような梵本写本の伝承（或いは翻訳）の過程での再解釈（或いは意図的な改作）に起因するのかもしれない。現行梵本で amitāyus が東方偈を中心に現れる点、東方偈が初めて編入された覺經の段階から仏名に搖れが見られる点から、仏名の再解釈や定着に東方偈が大きな役割を担ったことが推測される。

sambodhisatva は韻文にだけ見られ、「菩薩」を意味する(BHSD s.v.)。

[3a] 韵律形態は mch. の aupacchandasaka (ac: 6 mātrā + -U-U--, bd: 8 mātrā + -U-U--) の ac 句としても、opening が 7 mātrā となり不適当。tri. 句としても不適当。Ed.F. に従い *dakṣiṇāpaścima-uttarāsu と訂正すれば、tri. 句と解し得る。dakṣiṇā⁸⁾ は adv. dakṣiṇā⁹⁾ に基づくとも、複合語第1構成要素の語末で、韻律の要請で a > ā とも考えられる(Ai.Gr II-1, § 56; Geiger § 32.1, § 33.1)。複合語内の hiatus は韻律に応じて許される(cf. 2d, 4d amita-āyu)。しかし写本の支持なし。

[第2偈(Ed.A. 44,5-8; Ed.F. II,973-974, III,320); 第4偈(Ed.A. 44,13-16; Ed.F. II,977-978, III,321-322)]

bahupuṣpapuṭām ^{a)}	gr̄hituvā ^{b)}	UU-UU	-U-U-
nānāvarṇṇā ^{c)}	surabhī ^{d)} manoramām /	---UUU	-U-U-
(*nānāvarṇṇā		-U-UUU	-U-U-)
okiranti ^{e)}	naranāyakottamām	-U-UUU	-U-U-
amita-āyu ^{f)}	naradevapūjitatām //2//	UUU-UUU	-U-U-

主要な異説：a) N1 °puṭād; Ky 他 °putī; Gp I (T4, T2 以外) °puṭā—— b)

N1 ^otvā tenā; Ky 他 gr̄hitva te — c) N1 ^oā; T5 ^oām; Ro 他 ^oām — d) N1, Ky 他 surabhi; T4 pralabham; K6 prabhī; K7, T2, B, O2 parabhī — e) R, N1 okiranti; T5 他 u^o T3 ut^o; Ky utkiṁranti — f) Ky, T3, Gp II amitāyu; Ky, T3 はこの直後に 1d nāyakā ... 2d amitāyu を重複して示す。

種々の色を有し、香しく、心楽しませる、入れ物 [一杯に盛られた]

多くの花々を手に取って、彼らは人々の最上の導き手であり、人々と
神々によって供養された、アミターユ (ス) に撒きかける。

bahugandhapuṭām ^{a)} gr̄hituvā ^{b)}	UU-UU	-U-U-
nānāvarṇṇa ^{c)} surabhī ^{d)} manoramām ^{e)} /	---UUU	-U-U-
(*nānāvarṇṇa	-U-UUU	-U-U-)
okiranti ^{f)} naranāyakottamam ^{g)}	-U-UUU	-U-U-
amita-āyu ^{h)} naradevapūjitat ⁱ⁾ //4//	UUU-UUU	-U-U-

主要な異読： a) T4 ^opūṭāñ jalayah; Ky 他 ^oputī — b) T5 他 gr̄hitva; S, K4, K5 gr̄hitvā; Ky gr̄gr̄hitvā; O3 gr̄hitva; T4 grahitvam — c) R ^oā — d) T4 ^obhir; O2 他 ^obhi — e) R, K7 ^oā — f) Ky śakiranti; T5, K6, K7, T2, O2 ukiranti; T4 ukirayanti — g) N2, Kt naranti nara^o; T3 ^omā; Ky ^onāye-ko^o — h) T4 amitāmitāyur — i) Ky, T3 ^otum

種々の色を有し、香しく、心楽しませる、入れ物 [一杯に盛られた]

多くの香料を手に取って、(彼らは) 人々の最上の導き手、人々と
神々によって供養された、アミターユ (ス) に撒きかける。

[2a, 4a] 藏訳 2a me tog ... sñim 「両手一杯の花」、4a spos ... sñim 「両手一杯の香料」、覺経「衣械諸華」、寿経「天妙華」、如来会「衆妙花名香」、莊嚴「香花」。他に東方偈 6a puṣpapūṭebhi, 7a puṣpapūṭā。

Ved. puṭa m., puṭī f. は「皺、割れ目、袋、入れ物」など(PW s.v.; EWA-2 s.v.)、Pa. puṭa nt. は「入れ物、袋、鞄、窪み」などを表す(PED s.v.)。BHSD は puṣpapuṭa を「花の鞘、尊」とする。

今の場合、*puṣpa* (花)、*gandha* (香料) は明らかに *pūjā* (供養) のための供物であるので⁸⁾、*puta* は「(供物を盛る) 入れ物」であろう⁹⁾。また、*puṣpapuṭa* 「花々 [が盛られた] 入れ物」は「入れ物 [一杯に盛られた] 花々」と同義である (Ai.Gr II-1, §98, c)。これは後続の形容詞が *puṣpa* や *gandha* を修飾すると見られる点からも察せられる。

ところで、*puta* が円錐形の袋を表す一方で¹⁰⁾、トルファンのベゼクリクの壁画 (誓願画) の中に、人々が仏を供養する様子とともに、供物を盛った底の浅い器 (籠) を描いたものがある¹¹⁾。今の場合、*puta* はこのようないくつかの底の浅い器 (籠) を表したのかもしれない。

gr̥hituvā の母音 *u* (vait. の cadence : -U-U-の第4音節) は -tvā という suffix が *svarabhakti* を起こしたもの (cf. Pischel §584)。

[2b, 4b] a 句は vait.、c 句は *aparā*、d 句は vait. とも *aparā* とも解せる。b 句は opening が 9 mātrā と、vait. 或は *aparā* としては異例の形態。複合語の第一構成要素の語末の長母音が短になる現象は一般的なので (Geiger § 33.2; cf. Ai.Gr II-1, p.134; BHSG § 3.27ff.)、nānā° を *nānā° と訂正すれば、opening は -U-UUU となり、d 句同様に b 句も vait. 句とも *aparā* 句とも解し得る¹²⁾。bcd 句の形から、詩節全体が *aparā* で作られた可能性もあるが、これを裏付ける異説はない。

[2c, 4c] 対応する散文部分では *avakiranti* が用いられているので (Ed. A. 50,15)、*okiranti* (= *avakiranti*) が本来の読みと見て良いであろう。

[2d, 4d] *amita-āyu* : 複合語中の *hiatus* は BHS では韻律に応じて許される (BHSG § 4.51, 4.54; cf. Geiger § 67)。

[第 5 偈 (Ed.A. 44,17-20; Ed.F. II,979-980, III,322)]

<i>pūjitva^{a)} cā^{b)} te^{c)} bahubodhisatvā^{d)}</i>	--U- -UU -U--
<i>vanditva^{e)} pādām amitaprabhasya^{f)} /</i>	--U- -UU -U-U
<i>pradakṣiṇīkṛtya vadanti^{g)} caivam</i>	U-U- -UU -U--

aho ('')dbhutam^h śobhatiⁱ buddhakṣetram //5// U-U- -UU -U--

主要な異説：a) Ky, T3 °ta; T6, S, Gp III, IV °tvā — b) R cān; N1 cā; 他 vā — c) N1 ne; T4 tena — d) R, N1, T4 °ān; Ko, K3, K5 bodhisatvā — e) Ox 他 °ta — f) N1 °sya tasya — g) Ky, T3 pra°; R vandanti; Gp V vandati — h) Ox 他 bhuta(m); Gp IV など (d)bhūtam — i) R, N1 sobhati; T5, Gp II, V śobhavati; T4 śobhavatī; K6 他 śobhava

そして、彼ら多くの菩薩たちは〔このように〕供養し、アミタ・プラバ（光耀が量られたことがない者）の両足に〔頭を付けて〕表敬し、右回りを〔三度〕行なった後、また次のように語る、「おお、〔この〕仏土は驚嘆すべきであり、きらびやかである」(と)。

[5ab] 韻律上の要請により tri. の opening の第3音節で 5ab °tvā > °tva、第4音節で 5a ca > cā となっている。

[5b] pādām : acc.pl.m. (BHSG § 8.90)。「両足」(du.)のために pl. 形が代用されている (Pischel § 360; Geiger § 77; BHSG § 5.6)。

「両足に表敬する」とは、Pa. で pāde sirasā vandati と言われるように、頭を両足に付けて礼することで、尊敬の度合の高い礼法である¹³⁾。

[5c] pradaksīna 「右回り（右遡）」とは神聖なる崇拝対象に対する礼法の一つで、崇拝対象に対して右脇を向け右に回ること。Veda 時代に行われていた慣習を仏教でも受け継いだもので、三度回るのが一般的¹⁴⁾。

[5d] √śubh は active で「飾りたてる」を意味し、middle では「(飾られて) 美しい、きらめいている、きらびやかである」を意味する (PW s.v.)。ここでは active 形 śobhati は文脈上 middle の意味。active 形 śobhati の語末の音節は tri. の break の第3音節で、韻律上、短音節が必要であるため、middle 形 śobhate のために代用された (BHSG § 26.3)。

〔第6偈(Ed.A. 44,21-24; Ed.F. II,981-982, III,323)〕

te puśpapūṭebhi^a (^b-man(') okiranti^{-b}) --U- -UU -U-U

udagracittā atulāya^o prītiye^{a)} / U-U- -UU -U-U-
 vācam^{e)} prabhāṣanti purasta^{j)} nāyake^{g)} --U- -UU -U-U-
 asyāpi^{h)} kṣetramⁱ⁾ siya^{j)} evarūpam //6// --U- -UU -U--

主要な異読：a) Ky, T3 他 °putebhi; R 他 °putohi; Gp III, IV °putobhi など；
 T4, O2 °putohi; Gp V °putebhi など；N1 putohi — b) R, N1 manokiranti;
 Ky, K5, T3 punā°; T5 他 puno°; K7 他 puro° — c) Ky, T3 atulaya; T4, Gp
 III ('') tulāya; N1 atulyāya; Gp V atula — d) R, N1 他 prītaye; Ky, T3 他
 prītiye — e) R vācam; N1 bahu; Ky, T3 他 kāma(m) — f) R, N1, punas
 tu; S, T3 punas ta; Ky 他 puras ta — g) T6, S は nāyake の nā から 7c
 svalamkṛtam の kṛtam までを欠く — h) R, N1 他 asyāpi; Ky asyābhi; T3
 他 asmāpi — i) Ky, T3 他 °a — j) T5 sitā; Gp I (T5 以外) sia

彼らは無比なる喜びによって心は高揚し、入れ物 [一杯に盛られた]

花々を再び撒き掛ける。導き手に、面前で、「次の】言葉を語る、「こ
 の（私の）住処もこのようであって欲しい」（と）。

[6a] °putebhi の長母音 ū は tri. の opening の第 4 音節で、韻律の要
 請により、puta の第一音節が長母音である語形が用られた (Geiger § 32.1;
 BHSG § 3.20-26)。ただし、散文中でも puta を示す写本があるので
 15)、puta を puta の doblet として用いていたのかもしれない。

次に、man('') okiranti については辛嶋氏が議論されており¹⁶⁾、筆者も
 ほぼ同意見である。若干の調査結果の追加とともに以下にまとめる。

覚経「皆持華散佛上 心清淨稱無量」；如來會「咸以尊重心 奉諸珍妙
 供」；藏訳 de dag gis ni me tog sñim gtor nas 「彼らは両手一杯の花々
 を撒いてから」；他訳には対応なし。

manokiranti の前半部分 man('') 或は mano は、「再び、他方」などを
 意味する Pa. pana (Ved. punas; Pa., Prākṛt の語形について cf. Pis-
 chel § 342; Geiger § 34) に対応すると考えられる。

Aśoka 王碑文に manā/minā という語が現れ（十四章摩崖法勅 Erragudī¹⁷⁾ VI (F) vā minā; (J) cha mina; IX (H) vā mi[na]; (L) i[yam] mina; (N) [ham]che minā; XII (H) se cha mana; XIII (Q) se mana）、puna/pana (: punah) との対応が確認出来る¹⁸⁾。

maṇa, maṇo という語形は Gāndhārī Dharmapada (GDhp) にも現われる： GDhp 65b va maṇo = Dhammapada (Dhp) 271b vā puna = Udānavarga 32,31 vā punah; GDhp 272be atvāṇo maṇa = Dhp 252be attano pana = Patna Dharmapada 166be āttano puna¹⁹⁾。

今の場合、以前に既に花々を撒いており、punas 「再び」撒くという読みは文脈上妥当。2c, 4c に okiranti が現れている点、Pa. に pan' + 母音の例が多数見られる点から、筆者は *mana の語末の短母音が sandhi で脱落した man(') okiranti が本来の読みかと推測する。

荻原註²⁰⁾、Ed.A、Ed.F. は samokiranti と訂正する。sam-ava- ✓ kī の用例は Pa. に若干例を見出しうる (Petavatthu 20,16, 20,18; Jātaka i 27,19; Apadāna 111,29, 151,5, 227,15, 388,8 etc.; Buddhavaṃsa 20,26)。

特に Apadāna では、東方偈と同様に「供養の為に供物を撒く」という文脈で多用される。東方偈は授記の物語を含み、同様に授記の物語を有する Apadāna とは接点がある。従って、東方偈の作者が Apadāna と同じ用語を使うに至ったということも考えられるが、写本の支持が無い。

okiranti については 2c, 4c 参照。ava- ✓ kī + instr. の場合、instr. 形は撒かれる物、ここでは供物を示す (PW s.v. kar3 + ava)。

[6c] 覚経「於佛前住自説」；藏訳 'dren pa de yi spyan snar 「かの導き手の御前で」。purasta < *purastā (Prākrit: puratthā) < purastāt。

nāyake (loc.) は間接目的語を表すのであろう (Sa.-Synt § 145)。これが acc.sg. である、或は purastāt が loc. を支配する可能性は低い。

[6d] 19b にも菩薩が mamāpi kṣetram siya evarūpam(: evam°) 「私

の住処もこのようなものになって欲しい」と望むという記述がある。菩薩は自ら仏土を作る際、予めその様相を把握している必要があった²¹⁾。asya/asma については、後続の単語が全て単数形であるので、内容上、R, N1 と Ky の両系統がともに示す asya 「この (私の)」が妥当である。

註

- 1) Cf. 藤田宏達『原始淨土思想の研究』、岩波書店、1970、pp.21-96；香川孝雄『淨土教の成立史的研究』、山喜房佛書林、1993、pp.9-84。
- 2) 詳細について、福井真「Sukhāvatīvyūha (梵文無量寿經) 東方偈の研究」、『待兼山論叢』29(1995)、哲学篇、pp.1-15 参照。
- 3) 阪本純子「Pāli Jātaka に於ける mātrāchandas の性格」、『仏教研究』7(1978)、pp.155-176、§ 2, § 3 参照。
- 4) Cf. K. Warder, *Pali Metre*, London, 1967, p.202ff.; F. Edgerton, "The Meter of the Saddharmaṇḍarika," *Kuppuswami Sastri Commemoration Volume*, Madras, 1936, pp.39-45; do., "The Epic Triṣṭubh and its Hypermetric Varieties," *JAOS*, 59(1939), pp.159-174 など参照。
- 5) Cf. C. Caillat, "La finale -ima dans les adjectifs moyen- et néo-indiens de sens spatial," *Mélanges d'indianisme; a la mémoire de Louis Renou*, Paris, 1968, pp.187-204; BHSD s.v. purima; Pischel § 602; BHSG § 22.15。
- 6) Suttanipāta 671, 1122; Jātaka iii 234,2; iv 359,3; Vimānavatthu 24,8 ~ Petavatthu 33,22; BHS については BHSD s.v. diśatā- 参照。
- 7) Cf. J. Brough "Amitābha and Avalokiteśvara in an inscribed Gandhāran sculpture," *Indologica Taurinensis*, Vol.X(1982), pp.65-70 (esp. p.68); 阪本(後藤)純子「Sukhāvatīvyūha の韻律と原語: 欽仏偈、重誓偈」、『印仏研』42-2(1994)、pp.148-153 (esp. p.153)。
- 8) 例えば Ed.A. p.15,22ff., p.50,2ff. の供物の列挙を参照。
- 9) puṭa = (供物を盛る)入れ物、cf. puṣpavara, gandhavara, cūrnapuṭa などの列挙(Gaṇḍavyūha 543,17-20); SP 165,5 puṣpapuṭān gr̥hitvā に対して、妙法蓮華経「各以衣械盛諸天華」(大正 9、23a)など。「衣械」が puṭa- の訳語である点について、畠部俊英「『阿弥陀経』における「衣械」という語について」、『同朋仏教』35(1999)、pp.1-26 参照。
- 10) Cf. Kauśika Sūtra 25,30 prapuṭa; W. Caland, *Altindisches Zauber-*

- ritual*, Probe einer Uebersetzung der wichtigsten Theile des Kauśika Sūtra, Amsterdam, 1900 (*Verhandelingen N.R.* III.2.), p.72.
- 11) 村上真完「西域の仏教——ベゼクリク誓願画考——」、第三文明社、1984、pp.92, 168, 189, 191, 240, 246などの挿図参照。
 - 12) 韻律について、cf. 阪本 mātrāchandas § 2; § 3, 2.2. nāna- < nānā- の用例：Daśabhūmika (ed. Kondō) 133,5, 172,11。
 - 13) M. Allon, *Style and Function*, Studia Philologica Buddhica, Monograph Series XII, Tokyo, 1997, p.52ff. 参照。
 - 14) Cf. W. Caland, "Een indogermaansch lustratie-gebruik," *Verslagen en Mededeelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen*, Afdeeling Letterkunde, vierde Reeks, Amsterdam, 1898, pp. 275-325；中村元・早島鏡正・紀野一義『浄土三部経（上）』、岩波文庫、1963、pp.270-271; Allon, p.106。
 - 15) pūṭa-: 藤田本 973, 977, 981, 983, 1087, 1089, 1090, 1091, 1094。
 - 16) 辛嶋静志「初期大乗仏典の文献学的研究への新しい視点」、『仏教研究』26(1997)、pp.157-176. (esp. pp.157-158)。
 - 17) *Epigraphia Indica*, XXXII, ed. by D. C. Sircar and B. Ch. Chhabra, Delhi, 1962; 該当箇所を示す記号は E. Hultzsch, *Inscriptions of Asoka*, CII Vol.I, Oxford, 1925 (repr. Tokyo, 1977) に従う。
 - 18) Cf. H. Lüders, "Zu den Aśoka-Inschriften," *Philologica Indica*, Göttingen, 1940, pp.569-579 (esp. p.573ff.); L. Alsdorf, "Aśokas Separatedikte von Dhauli und Jaugāda," *Kleine Schriften*, Wiesbaden, 1974, pp.455-498 (esp. pp.486-487)。
 - 19) Cf. J. Brough, *The Gāndhārī dharmaśāstra*, London, 1962, § 36, § 69.
 - 20) 『梵藏和英合璧浄土三部経』、『浄土宗全書』第23巻、山喜房佛書林、1991、p.176、註 172。
 - 21) Sukh では菩薩 Dharmākara が仏 Lokeśvararāja に諸仏土の様相を説明してもらい、それを自らの仏土に取り入れる (Ed.A. 8,20ff.)。
 - * 紙数の都合により、略号や省略による引用文献の名称は CPD (A Critical Pāli Dictionary, begun by V. Trenkner, revised, continued and edited by D. Andersen and H. Smith, Copenhagen, 1924-) に従う。
 - * 本稿は平成13年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部。

(日本学術振興会特別研究員)

A Study of the *Toubouge* (東方偈) in the *Sukhāvatīvyūha* (梵文無量壽經)

— An annotated Japanese Translation (1) —

Makoto FUKUI

The *Sukhāvatīvyūha* (梵文無量壽經), which was composed in the early stage of Indian Mahāyāna Buddhism, is the most important text in Pure Land Buddhism. In recent years, a collection of the sanskrit manuscripts of the text was published. This enabled us to study the text critically.

The *Toubouge* (東方偈) is a hymn which is located in the second half of the *Sukhāvatīvyūha* and consists of twenty-one verses. It contains the story of the miracle performed by Buddha *Amitaprabha/Amitāyu*, which indicates that all creatures (*sattva*) will become buddhas. Considering the significance of the contents, I think this hymn played a very important role in the process in which idea found in the text developed. I propose a Japanese translation of the hymn. This paper treats the first to sixth verses.

Keywords : *Sukhāvatīvyūha* 無量壽經 東方偈 往觀偈